

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**  
**個人研究費**  
**2006年度研究成果報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名
	社会学部・助手	水原 俊博 印
研究課題	グローバル化する消費社会についての経済社会学的，記号論的研究	
研究期間	2006年度	
研究経費	480千円	

**研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)**

本研究の目的は第一に，近年，世界的に普及，発展している消費社会がアメリカ型の消費社会に同質化するのか，それとも多様化するのかを理論的，非参与観察調査などから実証的に研究，調査することである．第二に，これまで消費社会論における有力な理論的枠組みであった記号論を理論的に発展させることである．以上のような研究は以下の3つに大別できる．

- (1) グローバル化する消費社会についての理論研究
- (2) グローバル化する消費社会についての実証研究
- (3) 消費社会についての記号論の理論研究

なお，これらの研究過程で，これらと密接に関連する調査データ分析も行った．

**キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)**

[ 消費社会 ] [ グローバリゼーション ] [ 多様化 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

前頁で述べたように、本研究は 3 つの部分からなる。ここではこれら 3 つについてそれぞれ研究成果を説明していく。

**(1) グローバル化する消費社会についての理論研究**

消費社会のグローバル化については数多くの先行研究が内外で、また、多様な分野で蓄積されている。そうした先行研究を精査、整理し、理論、そこで用いられる諸概念を批判的に検討するのが、本研究の概要である。本年度は具体的にいえば、Ritzer のマクドナルド化論、Ritzer の議論を批判する Robertson らのグローバル化論や Watson らの人類学的研究、世界各地域の流通についてのマーケティング研究 (c.f. グローバル・マーケティング) などについて精査、検討した。こうした研究は当初、予定したサーベイ論文としてまとめることはできなかったが、本年度、執筆したいくつかの論文、学会発表の諸部分、また、所属する「グローバル消費文化研究会」(研究代表: 間々田孝夫) で応募し、採択された科研費、基盤研究 C の申請書の一部にその成果を見いだすことができる。なお、上述した研究会が毎月、開催した会合での報告、討議によって、研究を深めることができたことも付言しておく。

**(2) グローバル化する消費社会についての実証研究**

本研究は「世界中の消費社会はグローバル化によってアメリカ型の消費社会に同質化する」というグローバル化としての「マクドナルド化仮説」を設定し、非参与観察調査から実証的に研究し、また、調査対象となる地域の資料収集することを目的とした。昨年度のシンガポールに続き、本年度も、著しい経済発展をつづけるタイのバンコクを調査対象とし、調査研究、資料収集を行った。

**【調査概要】**

- 調査期間 2007 年 1 月 21 日～26 日までの 6 日間
- 調査地 バンコクの中央部  
ショッピング・センター／モール、デパートなどが軒を列ねる Siam, Chit Lom, Silom, Phrom Phong, そして、TESCO Lotus, Carrefour の 2 つのメガ・ストアが店舗を構える Ram 4 通り、ショッピング・センター／モール、メガ・ストアの集中する Ratchadipisek 通り、その他、バンコクに遍在するコンビニエンス・ストア、ファースト・フード店、ドラッグ・ストア、スーパー・マーケットでの調査を行った。

**研究成果の概要 (つづき)**

結論からいえば、バンコクでの調査データからマクドナルド化仮説には妥当する面もあれば妥当しない面もあることが、明らかになった。少し具体的に述べると、都心のショッピング・センター／モール、デパートには、規模、商品、店内の構成やデザインなどの質の点で、先進国のものに勝るとも劣らないものが数多くある。そこでは世界中から集められたブランド品を購入でき、世界中から進出した多様なファースト・フード店で食事ができ、シネコンで日本を含む世界中の映画を鑑賞できる。また、ドラッグ・ストアやコンビニや郊外のメガ・ストアで、アメリカなど先進諸国においてと変わらない消費をすることができよう。こうした点はマクドナルド化仮説を支持するだろう。だが、ショッピング・センター／モールなどの店舗の従業員、店員、消費者の行動、店舗の運営管理、提供される商品やサービスの「現地化 (localization)」の事例には、アメリカや日本、ヨーロッパなど先進諸国の消費社会では見受けられないものが多々あり、これらはマクドナルド化仮説を支持しないだろう。このような消費社会の画一化傾向と多様化傾向との共存は、マクドナルド化仮説だけでなく、Robertson らのグローカリゼーション論を含め既存の理論では十分に把握、分析できないように思われる。

**(3) 消費社会についての記号論の理論研究**

本研究は、グローバル化する消費社会についての理解を深めるために、博士論文(2005年、立教大学)で行った研究を継続し、消費社会の記号論の理論研究に取り組むことである。具体的には既存の記号論的消費社会論では、言語記号をモデルに消費対象、消費行動を分析するのであるが、情報、時間、空間を含めた消費対象は非言語記号として捉えることが妥当である以上、既存の議論は誤りを多く含むように思われる。こうしたことから、記号論の先行研究を検討し、消費対象、消費行動を捉えるのに適切な記号論の理論モデルの構築に着手したわけである。本年度は、昨年度から継続して、記号論、およびその周辺分野の古典、現代の文献を吟味した。当初、予定していたように、先行研究のサーベイ論文は結局、著すことができなかった。しかしながら、こうした文献のテキスト・クリティークの成果は、「差異化」をテーマとする諸論文の一部に見いだすことができる。

最後に：本年度は、上記した研究の過程で、既存の調査データの分析による実証研究にも取り組んだ。そこでは御資金で購入した統計分析ソフト (JMP) を強力なツールとして利用し、論文として成果をあげることができ、また、そこから本研究に大して、少なくない示唆をえることができた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

(1) 雑誌論文

- 寺島拓幸・水原俊博, 「消費による差異化の実証分析」『経済社会学会年報』27, 2007年, pp.180-194.
- 水原俊博, 「バンコクの消費社会の現在——SC/M, MS の非参与観察調査報告」『社会学研究科年報』14, 2007年, pp.21-30.
- 水原俊博, 「差異化消費と消費主義的価値意識——『2005年度国際化する消費生活調査』をとおして」『社会経済システム』28, 2007年, 査読中.
- 寺島拓幸・水原俊博, 「消費文化の断層——男性の消費価値観にみられる世代差」『経済社会学会年報』28, 2007年, 査読中.

(2) 図書

なし.

(3) シンポジウム・公開講演会の開催

なし.

(4) その他 (学会発表)

- 2006.10.29, 「Baudrillard の資本主義仮説の検証——日本の80年代消費社会に準拠して」(単独報告), 第79回日本社会学会大会@立命館大学(衣笠キャンパス).
- 2006.10.15, 「差異化消費に対する消費者意識と価値観」(単独報告), 第25回社会経済システム学会大会@神戸大学(六甲台キャンパス).